# 近年の石狩湾におけるスケトウダラGadus chalcogrammus 卵分布の 経年変化

本間隆之\*1, 三宅博哉2, 志田 修3, 三原行雄4, 板谷和彦5

<sup>1</sup>北海道立総合研究機構釧路水産試験場,<sup>2</sup>北海道立総合研究機構水産研究本部, <sup>3</sup>北海道立総合研究機構稚内水産試験場,<sup>4</sup>北海道立総合研究機構栽培水産試験場, <sup>5</sup>北海道立総合研究機構中央水産試験場

Recent changes in the distribution of walleye pollock Gadus chalcogrammus eggs in Ishikari Bay, Hokkaido

TAKAYUKI HONMA\*<sup>1</sup>, HIROYA MIYAKE<sup>2</sup>, OSAMU SHIDA<sup>3</sup>, YUKIO MIHARA<sup>4</sup> and KAZUHIKO ITAYA<sup>5</sup>

<sup>1</sup> Kushiro Fisheries Institute, Hokkaido Research Organization, Kushiro, Hokkaido 085-0027,

<sup>2</sup> Fisheries Research Department, Hokkaido Research Organization, Yoichi, Hokkaido 046-8555,

<sup>3</sup> Wakkanai Fisheries Institute, Hokkaido Research Organization, Wakkanai, Hokkaido 097-0001,

<sup>4</sup> Mariculture Fisheries Institute, Hokkaido Research Organization, Muroran, Hokkaido 051-0013,

<sup>5</sup> Central Fisheries Institute, Hokkaido Research Organization, Yoichi, Hokkaido 046-8555, Japan

To explore the possibility of detecting walleye pollock *Gadus chalcogrammus* strong year classes distributed in the Sea of Japan in Hokkaido, we examined the results of egg distribution surveys conducted yearly in February from 2006 to 2017 in Ishikari Bay. The density of eggs was extremely high in the years that strong year classes occurred. There were many differences in the occurrence of the dominant developmental stage among these years. However, there was no significant relationship between water temperature and the density of eggs. These results strongly indicate that the occurrence of strong year classes can be predicted using the densities of eggs in Ishikari Bay. Additionally, abundant stage 1 eggs have appeared in Ishikari Bay since 2014, suggesting that egg production has possibly increased. This study confirmed the importance of monitoring the egg distribution in Ishikari Bay.

キーワード:石狩湾,産卵場,スケトウダラ,日本海,卵分布密度

スケトウダラGadus chalcogrammusは北海道における 重要な漁業資源で日本海北部系群(山下ら, 2019),太 平洋系群(境ら, 2019),オホーツク海南部海域(石野ら, 2019),根室海峡海域(千村ら, 2019)の4海域・系群ご とに区分されて資源評価や管理が行われている。日本海 北部系群の主要な漁場である北海道日本海では,6月後 半~9月前半を除き周年操業する沖合底びき網漁業,11 月~翌年3月に沿岸に来遊する産卵群を対象として操業 する延縄や刺し網,定置網等の沿岸漁業により漁獲され ている。漁獲量は1992年に14.6万トンを記録した後,資 源の減少に伴い大きく減少し,2013年以降,1万トンを 下回る低い水準で推移している(http:// www.fishexp. hro.or.jp / exp / central/kanri/SigenHyoka/Kokai/, 2019 年4月19日閲覧,以下の引用では2018年度資源評価書と する)。

本資源の資源量や親魚量は断続的に発生・加入する著 しく豊度の高い年級群(卓越年級群)主体で構成される (2018年度資源評価書)。北海道立総合研究機構が4月に 実施している仔稚魚調査により推定された0歳魚の現存 尾数とコホート解析による推定資源量の推移(Fig.1) から,2000年以降では2006,2012,2015,2016年級群の 加入量が他の年級群と比べて顕著に多い(2018年度資源 評価書)。

本系群の加入量は親魚量に依存した変動傾向を示す

報文番号A578(2019年11月29日受理)

\*Tel: 0154-23-6222. Fax: 0154-23-6225. E-mail: honma-takayuki@hro.or.jp



Fig. 1 Recruitment (abundance at age-2 estimated by virtual population analysis) from 2006 to 2017 and estimated numbers of walleye pollock larvae and juveniles by acoustic surveys in April from 2006 to 2017

(Funamoto, 2007)が、生活史初期の水温や、卵・仔稚 魚期における産卵場から成育場への海流による輸送の成 否などの環境要因も加入量、特に卓越年級群の発生に強 く影響することが示唆されている(例えば三宅, 2012; Funamoto *et al.*, 2014)。特に卵の輸送に関しては、近年 において成育場の形成場所(雄冬沖から利尻礼文島まで の海域と武蔵堆海域)は変化していないが、産卵場が岩 内湾および檜山海域に南偏することで、1980年代以前に 比べて産卵場と成育場の距離が離れた、即ち、輸送距離 が長くなったことが指摘されている(三宅ら, 2008)。 加えて、三宅(2012)は、2007年の石狩湾における卵分 布密度が低いのは檜山海域から積丹半島に至る卵の輸送 経路の水温が7℃以上と高かったことにより卵の孵化率 が低下したためと考え、石狩湾におけるStage別の卵分 布状況と産卵場から成育場までの輸送経路の水温分布、 流速から、岩内湾および檜山海域で産出された卵の生残 をモニターできる可能性を指摘した。これらの知見に基 づいて、北海道立総合研究機構水産試験場では、2006年 以降、産卵盛期の2月に石狩湾および岩内湾においてネ ットを用いた卵採集調査を継続してきた。また、美坂ら (2019)は、1990年代~2000年代前半に本系群の産卵群 の主分布域が産卵海域の南寄りの檜山海域にあったが、 2000年代後半以降は、産卵群の主分布域が岩内湾海域か ら積丹半島沖に偏ってきた可能性を指摘しており、卵の 輸送経路や生残にも変化が生じていることが予想される。

本稿では、2006年以降から継続実施してきた石狩湾お よび岩内湾における卵採集調査結果を整理し、近年の卵 採集量や発生Stageの経年変化と、その分布状況による 卓越年級群の検出の可能性を検討した。

## 材料と方法

スケトウダラ卵の採集は2006~2017年2月に中央水産 試験場所属試験調査船おやしお丸(178トン,2009年まで) と稚内水産試験場所属試験調査船北洋丸(237トン,



Fig. 2 Map of the survey area. Symbols indicate net sampling and the Ocean observation stations.

Sampling date	Station number	Net type	Research vessel
20, 21 Feb.2006	St. 1, 2, 3, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14	80R	Oyashio Maru
6, 20, 21 Feb.2007	St. 1, 2, 4, 6, 10, 11	80R	Oyashio Maru
19 Feb.2008	St. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14	80R	Oyashio Maru
24 Feb.2009	St. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11	80R	Oyashio Maru
12, 13 Feb.2010	St. 2, 3, 5, 6, 10, 12, 13, 14	NORPAC	Hokuyo Maru
17 Feb.2011	St. 2, 3, 5, 6, 10, 12, 13, 14	NORPAC	Hokuyo Maru
23 Feb.2012	St. 2, 3, 5, 6, 10, 12, 13, 14	NORPAC	Hokuyo Maru
25 Feb.2013	St. 2, 3, 5, 6, 10, 12, 13, 14	NORPAC	Hokuyo Maru
23 Feb.2014	St. 2, 3, 5, 6, 10, 12, 13, 14	NORPAC	Hokuyo Maru
20 Feb.2015	St. 2, 3, 5, 6, 10, 12, 13, 14	NORPAC	Hokuyo Maru
22 Feb.2016	St. 2, 3, 5, 6, 10, 12, 13, 14	NORPAC	Hokuyo Maru
25 Feb.2017	St. 2, 6, 10, 12, 14	NORPAC	Hokuyo Maru

Table 1 Summary table of the egg surveys using NORPAC and 80R nets in Ishikari Bay and Iwanai Bay

2010年以降)を用いて実施した。調査点は、石狩湾と岩 内湾において産卵群を対象とした漁業が行われている海 域とその周辺に設定し(Fig.2)、各調査点において80リ ングネット(口径80 cm, 目合0.33 mm, 2006~2009年), またはNORPACネット(口径45 cm, 目合0.33 mm, 2010 ~2018年)による鉛直曳き採集を実施した(Table 1)。 スケトウダラの卵は分離浮性卵で、この海域では主に表 層から150 m層まで分布することから(金丸ら, 1979), 曳網は150 m深から表面までとし、海底の深さが150 m より浅い場合は海底直上からとした。

採集した標本は船上において約5%の海水ホルマリン で固定後,実体顕微鏡下でスケトウダラ卵を同定し,卵 の発生StageをNakatani and Maeda (1981および1989)に 準じて,次のとおり区分した。

Stage 1: 受精から前期胞胚期

Stage 2: 後期胞胚期から原口閉鎖直前

Stage 3: 原口閉鎖から胚体卵周4分3まで

Stage 4: 胚体卵周4分の3から胚体卵周1巡まで

Stage 1の卵は受精してからほぼ1日以内と推定される ため(遊佐, 1954)、本研究では、Stage1の分布域を産 卵場と見なした。

採集された卵数と採集ネットのろ水量から調査点毎の 卵分布密度を計算した。ろ水量は調査ごとに実施した無 網試験より算出した100 mあたりの回転数から求めたろ 水計1回転あたりろ水量に,ネット開口部に装着したろ 水計の回転数を乗じて求めた。なお,沿岸寄りの調査点 に深度が浅い点があるため(Table 2),深度の違いを考 慮し卵分布密度を100 m<sup>3</sup>の採集個数に換算して比較検討 した。卵分布密度の年比較には,石狩湾の全調査点の卵 分布密度の平均値を用いた。ただし,岩内湾については 荒天欠測が多く,数年を除いて採集量が僅かなため本報 告では定量的な検討を行わなかった。

水温観測は定期海洋観測調査(中央水産試験場 資源

 Table 2
 Location of the sampling stations in Ishikari Bay

 and Iwanai Bay

St	Latitude(N)	Longitude(E)	Depth(m)				
1	43°15.10'	141°14.80'	24				
2	43°20.10'	141°09.80'	40				
3	43°20.14'	140°59.80'	51				
*2006-2009: 43°20.10'N 140°59.80'E							
4	43°25.10'	141°04.80'	63				
5	43°20.14'	140°49.98'	80				
*2006-2009: 43°20.10'N 140°49.80'E							
6	43°30.10'	140°59.80'	94				
7	43°25.10'	140°49.80'	348				
8	43°30.10'	140°49.80'	468				
9	43°25.10'	140°39.80'	485				
10	43°30.10'	140°39.80'	693				
11	43°30.10'	140°29.80'	700				
12	43°30.11'	140°29.81'	468				
13	43°30.12'	140°29.82'	763				
14	43°30.13'	140°29.83'	1,286				

管理部 海洋環境グループ,海洋速報 http://www.hro. or.jp/list/fisheries/research/central /section/kankyou/ sokuhou/index.html, 2019年4月19日閲覧)の一環として 実施した。観測定点のうち石狩湾および岩内湾海域とそ の周辺に設定された調査点を用いた。

CTDにより最大水深500 m (500 m未満は海底直上) の計測と,表面水温を表面採水により棒状温度計で計測 した。

石狩湾の水温鉛直分布の検討には海洋環境(水温や海流の状況)の経年変化を把握できるように水深約700 m と深い沖合域のSt. 10(Table 2)の観測値を用いた。

水温水平分布図は定期海洋観測データからOcean Data Viewで作図した (Schlitzer, R., Ocean Data View, https://odv.awi.de, 2019.)。

Year	St	Stage1	Stage2	Stage3	Stage4	Total	Year	St	Stage1	Stage2
1 2 3 4 2006 6 7 8	1	0	0	0	0	0		2	0	(
	2	0	0	6	0	6		3	0	(
	3	4	0	15	312	332	2010	5	0	(
	0	0	0	57	57		6	0	11	
	2	8	123	12	145		10	6	3	
	0	20	691	113	824	Mean densi	ty (2-10)	1	3	
	8	3	26	3	32	64	Mean densi	ty (12-14)	22	22
	9	0	16	21	0	37		2	58	(
	10	0	112	39	1	152	2011	3	0	(
		0	22	15	1	39	2011	5	0	(
Mean densit	y (1-11)	1	20	91	53	166		6	100	35
Mean densit	y (12-14)	0	0	3		10	NC 1 .	10	0	(
1	0	0	14	0	14	Mean densi	ty(2-10)	32		
	2	0	0	0	0	0	Mean densi	1 <u>y (12-14)</u>	0	43
2007	5	0	0	0	0	0		2	0	43
	5	0	0	0	0	4	2012	5	0	10
	10	1	12	4	1	4	2012	5	0	200
Mean densit	10 v (1-11)	0	12	4	1	6		10	0	170
Mean densit	y(1-11) y(12-14)	0	-	No data	1	0	Mean densi	$t_{\rm V}(2.10)$	0	114
ivican densit	1	0	31	69	76	176	Mean densi	ty(12-10)	0	67
	2	35	70	45	5	155	Wiedin densi	2	0	(
	3	4	17	13	9	43		3	ů 0	(
	4	0	3	6	0	9	2013	5	ů 0	(
4	5	0 0	0	0	ů 0	0		6	0	(
2008	6	0	0	8	6	14		10	0	2
	7	0	1	0	0	1	Mean densi	tv (2-10)	0	1
	8	0	0	0	0	0	Mean density (12-14)		0	2
	9	0	0	0	0	0		2	0	(
	10	0	0	0	0	0		3	12	(
	11	0	0	0	0	0	2014	5	0	(
Mean densit	y (1-11)	4	11	13	9	36		6	0	(
Mean densit	y (12-14)	2	0	1	0	3		10	0	(
	1	0	36	24	0	59	Mean densi	ty (2-10)	2	(
2	0	6	108	57	171	Mean densi	ty (12-14)	1	1	
	3	0	0	0	0	0		2	82	(
	4	0	5	9	0	14		3	0	(
2009	5	0	0	0	0	0	2015	5	8	23
	6	0	0	0	0	0		6	21	42
	7	0	0	0	0	0		10	0	0
	8	27	1	0	0	28	Mean densi	ty (2-10)	22	13
9		0	0	0	0	0	Mean densi	ty (12-14)	215	65
	10	9	0	0	0	9		2	0	33
	11	0	0	0	0	0		3	0	(
Mean densit	y (1-11)	3	4	13	5	26	2016	5	0	(
Mean densit	y (12-14)			No data				6	0	10
								10	756	428

Table 3 Annual catch of eggs (numbers/100 m<sup>3</sup>) of each stage

#### 結 果

**卵分布調査** 2006~2017年2月における石狩湾のスケト ウダラ卵の平均分布密度(100 m<sup>3</sup>あたりの採集卵数)は 2012年の326個が最も多く、次いで2016年の317個、2006 年の166個, 2015年の82個の順となり, 2006年以降に発 生した4つの加入量の多い年級群(以下,卓越年級群と する) の卵分布密度が顕著に高かった (Table 3, Fig.3 上図)。岩内湾でも2012, 2015年の平均分布密度は高か ったが、2006、2016年は低かった (Table 3)。

Stage4

Total

1,260

Stage3

Mean density (2-10)

Mean density (12-14)

Mean density (2-10)

Mean density (12-14)

発生Stage別の平均分布密度を見ると、発生Stageを合 計した値が高かった2006年および2012年におけるStage 1の値はそれぞれ1個および0個と低く, Stage 2はそれぞ れ20個, 115個, Stage 3はそれぞれ92個, 139個と高かっ た (Table 3)。これと比較して、2016年はStage 1の卵が 151個と最も高く, Stage 2が94個, Stage 4が59個であっ



Fig.3 Mean density (numbers /100 m<sup>3</sup>) and proportion of walleye pollock eggs in Ishikari Bay from 2006 to 2017

た。2015年はStage 3の値が43個と最も高く,次いで Stage 1の卵が22個であった。Stage 1の割合は,2006~ 2014年は,2011年を除き0~20%と低かった。2011年は Stage 1が32個と全体の62%を占めていた(Fig.3下図)。 2014年以降はStage 1の割合が増加し,2015年は27%, 2016年および2017年はそれぞれ48%,49%であった。

調査点別に見ると、平均分布密度が高い2006, 2012, 2015, 2016年はほとんどの調査点で卵が採集されたが、 2006年はSt. 3, 7で高く、次いで石狩湾の沖側のSt. 6, 10 となっており、石狩湾奥のSt. 1~2では低かった。2016 年は沖合寄りのSt. 10で突出して高く、2012年と2015年 では調査点間の偏りは2006年や2016年と比較して小さか った。これら以外の加入量が多くない年級群では、2008, 2009, 2017年は沿岸寄りのSt. 1~2で100個台, 2011年で は沖合寄りのSt. 6で100個台と高かったが、2007, 2010, 2013, 2014年は全ての調査点で密度が100個未満の低い 値であった(Fig.4, Table 3)。

発生Stage別で見ると、卓越発生年ではStage 1の値は 2015年に沿岸寄りのSt. 2で82個とやや高く、2016年では 沖合寄りのSt. 10で756個と高密度に分布していた。2006 年と2012年は0~4個と低かった。Stage 2の値は2006、 2016年では沖合寄りのSt. 10で高かったが、2012年はSt.



Fig. 4 Mean density of walleye pollock eggs at stations in Ishikari Bay from 2006 to 2017 (numbers /100 m<sup>3</sup>)

5, 6, 10と沿岸寄りから沖合寄りにかけて高かった。 Stage 3およびStage 4の値は2016年で沿岸寄りのSt. 2で 2015年ではSt. 5で高かったが, 2006年ではSt. 3, 6, 7で 2012年ではSt. 2, 3, 6で沿岸寄りから沖合寄りにかけて 高かった。以上の通り, 卓越発生年では発生Stage別の 出現状況が異なっていた。これ以外の年ではStage 1の 密度は2008, 2011, 2017年以外では低く, 主にStage 2以 上の卵が分布していた。Stage 2以上の卵は2008, 2009, 2014, 2017年では主にSt. 1~3の沿岸寄りに, 2007年は 沿岸寄りと沖合寄りの両方に, 2010, 2011年はSt. 6, 2013年はSt. 10と沖合寄りに分布していた(Fig.4, Table 3)。

岩内湾は湾全体の平均値で見ると, 平均分布密度が高 い2012年ではStage 1の卵は採集されずStage 2~4が高か ったが, 2015年はStage 1とStage 3が高く, Stage 4は低 かった (Table 3)。両年とも石狩湾の同年の結果と同じ であった。

水温 石狩湾のSt. 10における2月の水温鉛直分布を見ると、卓越発生年では2006年は表面水温が5.3℃で、水深150 mで4.9℃、水深200 mでは4.3℃であった、2012年は50 m以浅では2006年よりやや高く50 m以深では2006年よりやや高く50 m以深では2006年は表面水温は6.7℃、表面~20 mでは7℃前後と高く、それ以深では2006、2012年と似た傾向を示した。2016年は表面水温が6.9℃と高く、150 mでは6.5℃、200 mで4.5℃で、この調査の中で最も高かった(Fig.5)。これ以外の年では2007、2010、2011、2017年は2016年同様、表面水温が5.7~6.8℃と高く、100 mで6.1~6.5℃、200 mでも5.8~6.8℃と高かった。2008、2013、2014年は表面水温が4.2~4.5℃、100 mでは3.2~4.8℃、200 mでは1.5~3.2℃と低かった(Fig.5)。以上の

通り,石狩湾において卵分布密度が高い卓越発生年に共 通した特徴的な水温鉛直分布の傾向は認められなかった。

産卵場と考えられている檜山海域,岩内湾および石狩 湾の表面水温分布を卓越発生年で見ると,2006年は檜山 海域および岩内湾が5℃,石狩湾は4~5℃といずれも低 い水温となっていた(Fig.6)。2012年も3海域とも5℃と 低く,また海域差がほとんどなかった。2015および2016 年は檜山海域が8~9℃,岩内湾が7℃台,石狩湾が5~ 6℃と各年2006,2012年より高かった。なお,これ以外 の年では2007,2009,2010,2011,2013,2017年は檜山 海域が7~9℃,岩内湾が6~7℃,石狩湾が5~6℃と水温 は高く,2008年,2014年は檜山海域が5~6℃,岩内湾が 4~6℃,石狩湾が3~5℃と水温は低かった。

卵発生の適水温範囲が0~7℃である(中谷ら, 1993) ことから、7℃の等温線の分布位置を見ると、2006, 2012年は檜山海域以北に7℃以上の水温は観察されず、 2015年および2016年は積丹半島の西側に分布していた。 それ以外の年では2009, 2010年は石狩湾に7℃台の水温, 2007, 2011, 2013年は岩内湾周辺海域に7℃以上の水温 が観察され、2017年は檜山海域に7℃以上の水温が観察 された。2008, 2014年は檜山海域以北に7℃以上の水温 は観察されなかった(Fig.6)。

石狩湾の表面水温と卵分布密度の関係を見ると,卵分 布密度が高かった2006年や2012年の表面水温は4~5℃と 低かったが,2015年は6℃台,2016年は5~6℃と1℃程度 高かった。一方,2008および2014年は2006年同様に表面 水温が低かったが,卵分布密度は低かった。なお,卓越 発生年の2006,2012,2015,2016年とそれ以外の年の石 狩湾海域の表面水温(Fig.5)の平均値には有意差が認 められなかった(t検定,P=2.23)。



Fig. 5 Vertical distributions of water temperature at station 10 in Ishikari Bay in February in a) 2006-2011 and b) 2012-2017



Fig.6 Surface water temperature distributions in February from 2006 to 2017 around the western coast of Hokkaido

考察

本稿では、2006年~2017年2月の石狩湾および岩内湾 におけるスケトウダラ卵分布密度のモニタリング結果を 取りまとめた。その結果、石狩湾に出現するスケトウダ ラ卵の分布密度から卓越年級群の発生を予見できる可能 性が高いことがわかった。本資源は断続的に発生する卓 越年級群を主体に資源が構成される傾向があり、TAC管 理や将来動向の予測には未加入資源の豊度推定が必要で ある。これについては本稿執筆時点では仔稚魚期と1歳 魚を対象とした計量魚群探知機による現存量推定値を用 いているが(2018年度資源評価書)、調査船による同一 時期の定点調査であるため、未成魚の主分布域を外した り、分布域が経年的に変化していったりする可能性もあ るため、卵期における豊度把握につながる石狩湾の卵採 集調査は、加入量の事前予測を補足するための有益な情 報となり、仔稚幼魚期調査結果の解釈の深化につながる。

一方,2015年は相対的には石狩湾における卵の分布密 度が高く,岩内湾でも調査期間中で最も高い卵分布密度 を記録した。しかし,岩内湾では他の卓越年級群の発生 年に卵分布密度が顕著に高かったわけではない。今後も 石狩湾と岩内湾で卵採集調査を実施することにより卓越 年級群の早期把握の確度は上がると思われるが,卵の分 布する時期は,特に岩内湾海域は海況が悪く,調査がで きないことが多い。今後も,調査船の限られた運航日数 の中で行うには,石狩湾の調査をより優先的に進めるこ とが効率的と考えられる。

石狩湾で卵が著しく多く出現した年級群が卓越加入す る傾向があるということは、石狩湾が主たる産卵場分布 となる、あるいは積丹半島以南が主産卵場であっても石 狩湾までの卵の輸送過程で生残率が高いか否かが、少な くとも2006年級群以降における卓越要因の一部となって いることが指摘できる。一方、本海域のスケトウダラの 加入量は2月の北部日本海、特に石狩湾周辺海域の表面 水温と強い負の相関があることが報告されている (Funamoto, 2007)が、本研究の対象期間では、卓越発 生年に低水温傾向であったとはいえず、石狩湾の水温分 布が近年の卓越要因となっている可能性は小さいことが 分かった。

水温以外に加入量に影響を及ぼす要因として, Funamoto et al. (2014) は初期生活史において移送され る場所や流路等をあげている。板谷ら(2009)は4月の 仔稚魚調査から道西日本海において仔稚魚が多く分布す るのは水深の浅い沿岸域と報告しており、移送される場 所が重要であることを示唆している。本研究の結果でも, 石狩湾内における各発生Stageの卵分布に年変動が観察 されており、他海域から石狩湾への輸送が年によって異 なることが確認できた。現在、シミュレーションによる 粒子追跡実験などにより、産卵場から成育場への移送に ついて年と産卵場別の比較と検討が行なわれており(日 本海区水産研究所、未公表)、加入量との関係が明らか になっていくと期待される。また孵化後の初期生残につ いては、石狩湾央に流入する石狩川に由来した栄養塩が 石狩湾東部の春季ブルーミングを支え、それが石狩湾産 ニシン資源の再生産に影響している可能性が指摘されて いる(星野, 2017)。今後は卵や仔魚の輸送過程ととも に孵化後の餌料環境についても詳細な検討が必要となる。 2014年以降, Stage 1の卵が石狩湾内に多く出現する

ようになったということは、石狩湾内での産卵が増えて いる可能性が示唆される。近年は2010,2012年級群の加 入で産卵親魚量に回復の兆候がみられており(2018年資 源評価書),さらに、産卵場自体が後志南部から積丹半島、 石狩湾海域へと北偏している可能性が指摘されている (美坂ら,2019)。今後さらに北偏傾向が継続すると、産 卵場から成育場までの輸送距離が短くなることにより加 入まで生残しやすい環境が続くこととなるため、卓越年 級群が産卵親魚量の増加につながり、さらに高豊度年級 群が発生するというように、資源回復がより顕著に進む 可能性がある。本研究から石狩湾の卵分布状況を把握す る重要性が確認された。今後も石狩湾のスケトウダラの 卵分布密度と発生Stage別のモニタリングは上記の観点 から必要であると考えられる。本調査の継続とともに海 洋環境や資源動向を注視していく必要がある。

# 謝 辞

本研究にあたり,標本採集,観測に携わってきた稚内 水産試験場試験調査船北洋丸,中央水産試験場試験調査 船おやしお丸船員各位に深く感謝する。本稿をまとめる にあたり,編集者および査読者には非常に有意義なアド バイスをいただいた。深く感謝の意を表する。

なお,本研究に用いたデータの一部は水産庁の委託事 業「我が国周辺水域漁業資源評価調査」および補助事業 「資源量推定等高精度化推進事業」によって得られたも のである。

## 引用文献

- Funamoto T. Temperature-dependent stock-recruitment model for walleye pollock (*Theragra chalcogramma*) around northern Japan. *Fish. Oceanogr.* 2007; 16: 515–525.
- Funamoto T, Yamamura O, Shida O, Itaya K, Mori K, Hiyama Y, Sakurai Y. Comparison of factors affecting recruitment variability of walleye pollock *Theragra chalcogramma* in the Pacific Ocean and the Sea of Japan off northern Japan. *Fish. Sci.* 2014 ; 80 : 117–126.
- 星野 昇. 石狩湾におけるニシン資源の変動要因. 月刊 海洋 2017;47:357-363.
- 石野光弘,境磨,山下夕帆,千村昌之,山下紀生.平成 30年度スケトウダラオホーツク海南部の資源評価. 平成30年度我が国周辺水域の漁業資源評価 第1分冊. 水産庁増殖推進部・国立研究開発法人水産研究・教 育機構,東京.2019;394-418.

板谷和彦, 三宅博哉, 和田昭彦, 宮下和士. 北海道日本

海・オホーツク海沿岸域におけるスケトウダラ仔稚 魚の分布.水産海洋研究 2009;73:80-89.

- 金丸信一,北野裕,吉田久春.カムチャッカ半島周辺 海域のスケトウダラ(*Theragra chalcogramma*)の卵
   ・稚魚の分布について.北海道区水産研究所研究報告 1979;44:1-23.
- 美坂 正, 星野 昇, 渡野邉雅道, 本間隆之, 志田 修, 三原行雄, 板谷和彦, 三宅博哉. 北海道日本海海域 におけるスケトウダラ産卵群の分布変化. 北海道水 産試験場研究報告 2019;95:55-68.
- 三宅博哉,田中伊織.北海道日本海のスケトウダラ資源の変動.月刊海洋 2006;38:187-191.
- 三宅博哉,板谷和彦,浅見大樹,嶋田 宏,渡野邉雅道, 武藤卓志,中谷邦敏. 卵分布からみた北海道西部日 本海におけるスケトウダラ産卵場形成の現状.水産 海洋研究 2008;72:265-272.
- 三宅博哉. 音響学的手法を用いたスケトウダラ北部日本 海系群の資源動態評価と産卵場形成に関する研究. 北海道水産試験場研究報告 2012;81:1-56.
- Nakatani T, Maeda T. Transport Process of the Alaska Pollack eggs in Funka Bay and the adjacent waters, Hokkaido. *Bull. Japan.Soc. Sci. Fish* 1981 ; 47 : 1115–1118.
- Nakatani T, Maeda T. Distribution of copepod nauplii during the early life stage of walleye pollock in Funka Bay and vicinity, Hokkaido. *Alaska Sea Grant Report*, 89–1, Univ. Alaska, 1989 ; 217–240.
- 中谷敏邦,前田辰昭.スケトウダラの初期生活史.北海 道水産試験場研究報告 1993;42:15-22.
- 境 磨,山下夕帆,石野光弘,千村昌之,山下紀生.平 成30年度スケトウダラ太平洋系群の資源評価.平成 30年度我が国周辺水域の漁業資源評価 第1分冊.水 産庁増殖推進部・国立研究開発法人水産研究・教育 機構,東京.2019;419-470.
- 千村昌之,境 磨,山下夕帆,石野光弘,山下紀生、平 成30年度スケトウダラ根室海峡の資源評価、平成30 年度我が国周辺水域の漁業資源評価 第1分冊、水産 庁増殖推進部・国立研究開発法人水産研究・教育機 構,東京、2019;375-393.
- 山下夕帆,千村昌之,境 磨,石野光弘,山下紀生.平 成30年度スケトウダラ日本海北部系群の資源評価. 平成30年度我が国周辺水域の漁業資源評価 第1分冊. 水産庁増殖推進部・国立研究開発法人水産研究・教 育機構,東京.2019;310-374.
- 遊佐多津雄. スケトウダラ*Theragra chalcogramma* (Pallas) "Alaska Pollack"の正常発生に就いて. 北海道区水 産研究所研究報告 1954;10:1-15.